



たてやま

おらがんまっち

南総祭礼研究会

2014.3 No.21



国分

館山市館野地区



国分地区の様々な歴史の舞台となった国分寺

館山市の内陸部に位置する国分地区は、古来より内房と外房をつなぐ街道に面しており、その歴史は奈良時代までさかのぼり、聖武天皇の御世発せられた国分寺造営の詔によって、安房国の国分寺が置かれた地区です。平安時代に朝廷から親孝行を表彰された伴直家主を祀る「孝子塚」があり、この記念碑は安房の三名工と言われた石工の武田石翁が刻んだものです。また江戸中期には、江戸幕府をも騒然とさせた万石騒動の舞台ともなっています。領主の過分な取り立てに対し領民は老中への直訴を行い、三名の名主の犠牲を払いながらも農民たちの勝訴となった万石騒動は、有名な農民一揆であると同時に、地域においては未永く「三義民」の功績を称えるため国分寺に供養塔が建立されました。平成二十二年には三百回忌が挙行されています。

こうした歴史は、「孝子のいでしところなり、義人のいでしところなり」と、館野小学校校歌にも歌われ地域の子ども達に伝えられています。

地域の紹介

自慢の山車

明治四十五年(1912年)に他地区より購入したとされる国分地区の山車は、勾欄三段式の江戸型山車です。囃子座の柱には珍しい植物の彫刻、欄間上にも欄干が見られる特長を有しています。しかし譲り受けてから一世紀を迎えようとしていた山車の老朽化は著しく、平成十二年より青年が中心となって各部の修理、補修が始まりました。泥幕、提灯の新調を皮切りに、平成二十三年には区全体での取り組みとなり大掛かりな山車本体の改修が行われています。

これにより、台座部四周に施されていた彫刻を生かし、後方は台座部と下勾欄の二段となり、金物も新調され、全長が五十七センチ長くなりました。また改修によって彫刻師「後藤喜一」の名が明らかにになりました。そして平成二十五年には上下胴幕、人形が新調され、その姿はまったく新たなものになり、区民の誇りとなって甦りました。幕には龍虎、鷹の刺繍が施され、人形は諏訪神社の御祭神「建御名方命」となりました。

区、神社、青年団が一体となった結束が具現化された国分地区の山車は、着実に次世代に引き継がれています。

- 棟梁、不明
- 彫刻師、後藤喜一
- 人形、建御名方命
- 扁額、國華
- 上幕、鷹
- 下幕、龍虎
- 制作年、明治四十五年(購入と伝わる)
- 半纏、國分
- 提灯、國分
- お囃子、四丁目、ひつとこ、馬鹿囃子、砂切、早馬鹿



近後画



平成25年に新調された胴幕(左:上胴幕 松に鷹、右:下胴幕 龍虎)

国分の彫工後藤喜三郎橘義信の長男 喜一(喜一郎) 作の彫刻